

令和3年度

文部科学省委託「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」
特別な配慮を必要とする幼児への指導の充実に関する調査研究

特別な配慮が必要な幼児に対し、特別入試枠を設け、
12年間の継続的支援を実行するための幼児期段階での包括的調査研究
—国立大学附属幼稚園の地域貢献を目指して—

令和4年3月
国立大学法人 福井大学

目次

1 はじめに

2 研究目的

3 研究方法

(1) 特別入試枠に関する調査研究

(2) 遊びと学級づくりを通したインクルーシブ教育システムを踏まえた開発研究

(3) 保護者支援を含む移行支援の在り方についての実践研究

4 成果と課題

5 最後に

資料

別紙1 園児募集要項（3・4歳児）

別紙2 幼稚園・大学インクル部門の協働実践支援体制、支援体制（図）

別紙3 個別の教育支援計画・指導計画

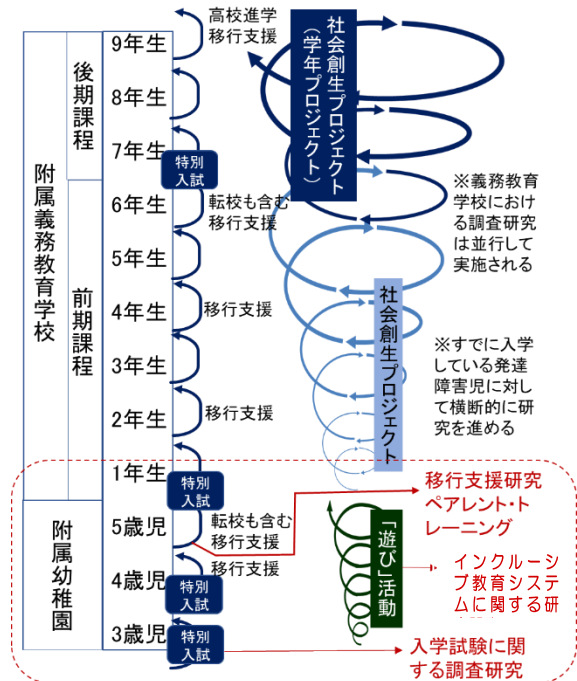
別紙4 令和3年度 保育観察実施報告

1 はじめに

附属幼稚園(6学級)及び附属義務教育学校(前期課程12学級・後期課程9学級)では、毎年、知的障害はないが発達障害と思われる特別な配慮を必要とする幼児・児童・生徒が40名以上在籍している。そのような発達障害と思われる特別な配慮を必要とする子供の中には、学業不振や学校不適応を示す場合もある。また、そのような発達障害と思われる特別な配慮を必要とする子供に対し、保護者は、幼児期から「育てにくさ」を感じているケースも見られる。

近年、公立学校においても通常学級で学習活動をする発達障害のある子供の支援や早期からの保護者支援の在り方が教育課題となってきた。特に、幼児教育段階では、どのようにして遊びの中でインクルーシブ教育システムを実現するか、また、どのように保護者支援を実現するかが課題となっている。

一方、国立大学の附属学校は地域の教員研修学校として機能することが期待されており、発達障害のある子供を含む通常学級での授業づくりの研究開発、及び、現職教員の力量形成が求められている。そこで、令和3年度より本学では、学部・大学院を改組し、附属学校園の教員、教育学部及び教職大学院の教員、さらに医学部・子どものこころの発達研究センターの教員からなる全学組織を立ち上げ、地域のニーズに応え、附属学園の特別な配慮を必要とする幼児の12年間にわたる教育研究開発を実施することになった。この全学組織(総合教職開発本部)は、専任教員と兼任教員を合わせて25名程度からなる組織であり、「国際教職開発部」、「地域教職開発部」、「インクルーシブ教育部」から構成されている。このインクルーシブ教育部では、附属特別支援学校とも連携し、附属幼稚園・附属義務教育学校に特別な配慮を必要とする幼児の入園の特別枠を設置し、附属幼稚園の3歳児から義務教育学校の9年生までの12年間のコフォート型の教育研究を進めるものである。



コフォート研究全体の中の本調査研究の位置づけ

2 研究目的

本研究では、この12年間の教育研究のうち幼児教育段階での(1)特別入試枠に関する調査研究、(2)遊びと学級づくりを通じたインクルーシブ教育システムを踏まえた開発研究、(3)保護者支援を含む移行支援の在り方についての実践研究を行う。

3 研究方法

(1) 特別入試枠に関する調査研究

〔目的〕

本園では、園医による健康相談、学園相談室「こもれび」※1の特別支援教育コーディネーター（以下、特コと記す）による教育相談を行い、入園直後から一人一人の成長・発達に応じた適切な支援と配慮、集団の育ち合いを保護者と共に支えてきた。しかし、入園前より我が子のコミュニケーションや行動面などにおいて気がかりさや育てにくさを感じている保護者は多く、子育てに不安を抱える現状がある。

特別入試枠では、気がかりさのある子に対して入園前から保護者と協働し、個を支えるための支援の在り方を探る。特別入試枠の設定の意図は、入園前から子やその保護者への理解を深め、受け入れの体制整備や支援策を考えることに主眼がある。特に、幼稚園事前説明会、希望者との面談、選考に至るまでの子育て広場（未就園児への園開放）の在り方、入園選考、園内支援体制、12年間をつなぐ個別の教育支援計画・個別の指導計画の様式の観点から検討する。園が考える特別入試枠は、入園前から保護者と一緒に子を支えるための親子支援ととらえ、特別入試枠を「親子支援枠」と位置付けて取り組む。

※1 学園相談室「こもれび」

福井大学教育学部附属学園のインクルーシブ教育システム推進を目的に学園に設置された相談室。大学教員、各校園の特コ、養護教諭、スクールカウンセラーらで組織され、幼稚園から義務教育学校修了までの12年間を通した相談活動を担う。なお、学園相談室「こもれび」では特コを教育相談コーディネーターと称しているが、本研究では一般的な名称として特別支援教育コーディネーターと記す。

〔内容〕

「親子支援枠」の取組においては、その枠組み、入園選考の方法、内容の検討、園内支援体制の構築などを実践的に検討するために実行委員※2によるワーキング委員会を立ち上げた。メンバーは表1の通りである。メンバー全員が福井大学総合教職開発本部インクルーシブ教育部に属しており、また、多くが大学・大学院と附属学園を兼務していることは、本研究が幼稚園を核として大学・大学院が協働して取り組むことを可能にした。

さらに、本ワーキングのメンバーの一部は、学園相談室「こもれび」の中心的なメンバーでもあり、これまでの本園におけるインクルーシブ教育システムの実践を研究の取組に生かすことができた。

ワーキングのメンバーは、後述する子供の観察や保護者面談等の取組に参加し、「親子支援枠」希望の保護者や対象児と直接に関わって、取組内容の検討と取組の実践を同時進行的に行うことで、より実効性のある内容・方法を検討することができた。

※2 実行委員

実行委員とは、本計画書（p7）に記載した具体的な調査研究体制の調査研究実行委員のことである。

表1 ワーキング委員会のメンバー

「こもれび」のスタッフ④⑤⑥⑦は、通常の業務として在籍児の観察、保護者面談等の教育相談を担う。

⑨は後述する子育て広場以降の子供の観察や入園選考時に加わる。

⑩は後述する保育実践の協働研究者。

所 属	「こもれび」スタッフ	その他
① 附属幼稚園園長（大学院兼務）	相談室長	
②附属幼稚園副園長		
③附属幼稚園教員（大学院兼務）		本研究担当
④附属幼稚園教員	幼稚園特コ	ワーキング連絡調整
⑤附属特別支援学校教員	特別支援学校特コ	
⑥大学教員（附属学園兼務）	学園相談室特コ	「こもれび」事務局
⑦大学教員（附属学園兼務）	学園相談室特コ	
⑧大学教員（附属学園兼務）		
ワーキング委員以外の参加メンバー		
⑨大学教員（附属学園兼務）		実行委員
大学教員		非実行委員

入園選考にあたっては、通常の入園選考に関わる説明会に合わせて「親子支援枠」についての事前説明会を実施し、選考に向けて事前に希望者の調査、子供の観察を行うこととした。ねらいは二つある。一つは、親子支援枠について保護者と共通理解をもち、入園選考から保護者との連携関係を構築するためである。もう一つは親子支援枠対象児の判断を行うことである。幼児期に子供の特性を見極めることの難しさはこれまでの入園選考においても課題となっており、子供の特性の見取りについて実効性のある取組の必要性が検討された。

ア 令和4年度 幼稚園事前説明会

令和4年度園児募集（別紙1参照）は、例年同様、3歳児3年保育40名程度、4歳児2年保育若干名を募集。募集人数に「親子支援枠」対象児も含み、若干名とした。

「親子支援枠」概要について、「幼児の中には、自分の好きなことに夢中になる一方で、関心の持てないことや人との関わりに困難さを抱える子がいる。人との関わりに困難さを抱える子は、集団の中でわだかまりを感じたり、自己否定に陥ったりすることがある。自分らしさが遊びの中で生かされ、周りに認められる安心感の中で自己を発揮できることが幼児教育では特に重要である。このような幼児教育を実施するためには、保護者と教師が子の得意なことや不得意だったり戸惑いを感じたりすることを含めてその子自身を深く理解し、協力して一人一人の成長・発達に応じた適切な支援と配慮、集団の育ち合いによって子の可能性を拓き、成長を支えていくことが大切である」と伝えた。

概要説明後、「親子支援枠」に関心のある保護者を対象に個別面談を実施。相談内容は、行動や認知面、日常生活面などの気がかりさや育てにくさについてであった。

イ 「親子支援枠」希望者面談

説明会を受けて、「親子支援枠」希望者には直接、面接を実施した。「親子支援枠」についての理解を保護者に求めることと、入園選考に向けての取組について説明を行うためである。また同時に対象児の把握に向けての保護者からの情報聴取のためである。

面談は、多面的に子と保護者の様子を把握できるように、ワーキング委員の二人一組で実施。一組の保護者に対し面談者は2名で対応した。

面談は複数の面談者による聴取内容を統一し、子の理解が保護者、幼稚園共により客観性を持って把握できるように、質問紙を用いた半構造化面接の方法をとった。そのために質問紙の内容についてはワーキングで検討し、作成した。

面談の実際は、質問紙を用いて、その場で保護者が質問紙に回答すると同時に面談担当者が子に対する気がかりさや困難さを丁寧に聴取した。

今後、子の遊びや同年齢児との関わりの様子を把握するため、子育て広場への参加や入園決定後において、「こもれび」の定期面談及び園の健康相談を受けることの承諾を確認した。

ウ 子育て広場を活用した取組

本園の未就園児への園開放「子育て広場」の機会を活用し、対象児の行動および対象児と保護者との関わり合いの観察（参与観察）、保護者面談、子育て広場参加メンバーによるカンファレンスを実施した。

子育て広場は、未就園児への園開放の場として、通年4月から11月の毎週木曜日（14:30～15:30）に開催している。広く地域に開放し、地域支援の一助として0歳児から受け入れを行っている。基本的には園庭での活動であるが、「親子支援枠」希望者が参加する子育て広場では、子の様子や親子の関わりがより理解できるように園庭や園舎を開放した。

8月5日（木）、8月26日（木）、9月9日（木）に開催した3回の子育て広場は、令和4年度入園希望の参加者がほとんどであったため、同年齢の幼児が関わることのできる集団の場となった。遊びの内容は、園庭に砂場や色水、保育室にままごとやソフト大型ブロック、運動遊びや製作などの環境を整えた。

ワーキング委員（表1③～⑧）と実行委員でもある大学教員1名（表1⑨）（以下、実行委員らと記す）は遊びへの興味・関心、他児への関わり方などを視点に「親子支援枠」対象児と保護者を観察した。一組の親子に対して実行委員2名が担当。子育て広場終了後、保護者と面談を実施し、子育て広場での子の観察内容について保護者と共有し、保護者の子に対する捉え方を確認した。

その後、実行委員でカンファレンスを行い、子や保護者の行動や面談内容を分析し、親子について多面的に理解を深めた。

エ 入園選考

令和4年度園児募集は、令和3年9月10日（金）～令和3年9月16日（木）を出願期間とし、募集を行った。入園選考は、3歳児を月齢順（1グループ：4月～7月、2グループ：8月～11月、3グループ：12月～3月）に3グループに分け、保護者と離れて好きな遊びをしたり、絵本の読み聞かせや手遊び、歌を歌うなどの保育を受けたりした。「親子支援枠」対象児も「一般枠」同様、月齢順のグループに参加した。保育は、教師3名が行い、子の様子を「子育て広場」から関与した実行委員と本園教職員で観察した。観察内容についてはワーキング委員会で観察視点を検討し、項目枠による観察シートに自由記述方法で、各観察者がそれぞれに記録することとした。主な内容は問いかけた時の反応や様子、態度、粗大・微細運動、絵本の読み聞かせや手遊びへの興味・関心、大人や同年齢の子との関わりなどである。

保育終了後、ワーキング委員らと本園教職員とで入園選考委員会を行い、受検した一人一人の様子について保育者、観察者それぞれの見取りを共有し、入園について慎重に検討した。

オ 園内支援体制検討（別紙2-1、2-2参照）

入園選考後のワーキング委員会での検討事項は、対象児に対する入園前までと入園後の取組、及び、次年度の入園選考に向けての取組、地域支援などについてである。これらは「親子支援枠」のみならず、園全体のインクルーシブ教育システム体制の一環として取り込まれるとして、総合的に検討された。

令和4年度「親子支援枠」入園対象児においては、令和4年1月に、学園相談室「こもれび」の特コと本園特コが保護者面談を行った。面談では、現在の子の様子を把握するとともに、保護者の意向を聴取し、子の成長・発達に応じた適切な支援と配慮を保護者と共に考えていくことを確認した。合わせて保護者の希望や願いを傾聴し、現在の子育てや今後の入園に対して安心感が持てるよう配慮した。その後、実行委員でワーキング委員会を開催し、入園後の具体的な支援を検討。3月に、保護者、管理職、実行委員での支援会議を行い、保護者の意向を聞き取りながら、子への支援について具体的に提示した。

令和4年4月の入園後は、インクルーシブ教育部の大学教員等が定期的に対象児を観察・個別支援する。その後、対象児の見取りや支援について担任と共有、関係者とのカンファレンス、保護者相談（健康相談、教育相談を含む）、支援会議を重ね、対象児の遊びや生活を保障していくこととした。

これらの支援が継続的に取り込まれるように記録の内容・方法・形式についてもワーキング委員会で検討し、附属義務教育学校との接続も念頭に、個別の教育支援計画・個別の指導計画の様式を決定した（別紙2-1、2-2、2-3参照）。通常の相談対象児と同様に、「親子支援枠」対象児についても個別ファイルを作成し、詳細を記入する。入園前の実態や園生活の様子から子について把握し、どのような支援が必要か、どのように支援を行ってき

たかを具体的に記録する。また、支援会議の記録から今後の支援の見通しを立てる。園生活3年間の記録が、その後の9年間（義務教育学校前期課程・後期課程）に生かされるように統一した様式を使用することとした。

令和4年度からは地域支援の一助として、未就園児を対象とした子育て広場を月2回、年間を通して開催する。0歳児から受け入れ、同年齢の子供たちと遊ぶことができる場を提供する。子育て広場には、月1回程度インクルーシブ教育部の大学教員等も参加し、保護者が抱える気がかりさや育てにくさなどといった保護者の悩みに対応する。

以上、保護者との関係構築に早期から取り組むことと、子の状況をよりの確に捉えるために、保護者面談と対象児観察の機会を複数回、設定した。（表2）

通常システム	親子支援枠	保護者	対象児
入園事前説明会	説明	個別面談…関心のある保護者対象	
願書受取	来園による願書受け取り	個別面談…「支援枠」説明 質問用紙による聴取 子育て広場参加要請	質問紙からの実態把握
子育て広場	3回参加	個別面談…対象児の観察 知見と合わせた実態把握	行動観察による見取り
入園選考	通常と同様の受検	通常的面談	観察シートによる行動観察の見取りと判断
合格発表後		個別面談…保護者の要望聴取、対象児の状況聴取、入園後の支援体制の説明	在籍園などの訪問・聞き取りと観察

表3 特別入試枠に関する取組一覧

月/日	項目	内容
4/5 (月)	園内勉強会	「自園が考えるギフトッド」とは
4/22 (木)	文部科学省ヒアリング (第1回)	事業計画の確認
4/22 (木)	調査研究実行委員会 第1回総合教職開発本部会 (インクルーシブ教育部門)	附属義務教育学校園における園児、児童、生徒の実態把握 「特別入試枠」「親子支援枠」の概要共有
4/27 (火)	第1回ワーキング委員会	「親子支援枠」仕組検討

令和3年度文部科学省委託「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」
 特別な配慮を必要とする幼児への指導の充実に関する調査研究

5/6 (木)	第2回ワーキング委員会	「親子支援枠」園児募集要項検討
5/14 (金)	第2回総合教職開発本部会 (インクルーシブ教育部門)	附属義務教育学校園における「特別入試枠」「親子支援枠」の募集要項作成
5/18 (火)	園内勉強会	「親子支援枠」についての共通理解
5/20 (木)	全体検討会議	対象児の抽出について検討 保育観察、保育検討会についての持ち方について検討
6/2 (水)	第3回ワーキング委員会	園児募集要項「親子支援枠」最終案作成 令和4年度幼稚園事前説明会における「親子支援枠」の持ち方検討 「親子支援枠」入園希望者への具体的な内容検討
6/11 (金)	文部科学省ヒアリング (第2回)	「親子支援枠」についての概要と取組の説明、質疑応答
6/11 (金)	第3回総合教職開発本部会 (インクルーシブ教育部門)	附属義務教育学校園における「特別入試枠」「親子支援枠」の募集要項完成 「親子支援枠」選考に向けての流れ検討
6/14 (月)	外部講師による園内研修 白梅学園大学 名誉教授 無藤 隆氏	個を生かした振り返りの時間の持ち方について
6/22 (火)	第4回ワーキング委員会	「親子支援枠」入園希望者への受け入れ内容検討
7/20 (火)	第5回ワーキング委員会	「親子支援枠」入園希望者への受け入れ内容確認
7/26 (月)	ア 幼稚園事前説明会 (別紙1参照) 園見学会	令和4年度 園児募集要項配布 「親子支援枠」概要説明 「親子支援枠」にかかる質疑応答 「親子支援枠」入園希望者面談
7/29 (木)	イ 「親子支援枠」入園希望者面談開始	
8/4 (水)	外部講師による園内研修 お茶の水女子大学 教授 宮里 暁美氏	個に寄り添う環境構成とは
8/5 (木)	ウ 子育て広場開催 (「親子支援枠」入園希望者参加)	対象児の観察、保護者との面談 観察・面談者間カンファレンス

令和3年度文部科学省委託「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」
 特別な配慮を必要とする幼児への指導の充実に関する調査研究

8/23 (月)	文部科学省ヒアリング (第3回)	経過報告
8/26 (木)	子育て広場開催 (「親子支援枠」入園希望者参加)	対象児の観察、保護者との面談 観察・面談者間カンファレンス
9/9 (木)	子育て広場開催 (「親子支援枠」入園希望者参加)	対象児の観察、保護者との面談 観察・面談者間カンファレンス
9/10 (金)	入園選考募集開始 (～16)	
9/25 (土)	エ 入園選考 第6回ワーキング委員会	「親子支援枠」入園選考
10/11 (月)	第7回ワーキング委員会	入園選考の振り返り 「親子支援枠」対象児入園前・入園後の 支援体制検討
10/18 (月)	外部講師による園内研修 千葉大学 教授 松寄 洋子氏	個の特性を生かした運動遊びについて
11/8 (月)	第1回ペアレントトレーニング 研修 福井大学 子どものこころの発達 研究センター 学術研究員 矢尾 明子氏	ペアレントトレーニング概論
11/18 (木)	第8回ワーキング委員会	オ 園内支援体制検討 (別紙2-1、2-2参照) 12年間をつなぐ個別の教育支援計画・個 別の指導計画の様式検討 (別紙3-1、3-2、3-3参照)
11/29 (月)	外部講師による園内研修 大阪総合保育大学 教授 瀧川 光治氏	個の特性を集団に生かす
12/6 (月)	外部講師による園内研修 仁愛大学 教授 石川昭義氏	これからの幼児教育の動向について
12/20 (月)	第2回ペアレントトレーニング 研修 福井大学 子どものこころの発達 研究センター 学術研究員 矢尾 明子氏	ペアレントトレーニング実践
1/19 (月)	全体検討会議	各学年の記録、考察の共有 今年度のまとめと来年度への見通し
1/25 (火)	「親子支援枠」対象児保護者面談	幼児の現状把握

		入園後の園生活について 保護者の意向の聴取 入園前の支援会議について
2/4 (金)	第9回ワーキング委員会	「親子支援枠」対象児の面談内容共有 支援会議の検討
2/7 (月)	外部講師による園内研修 白梅学園大学 名誉教授 無藤 隆氏	個の特性を生かした保育とは
2/25 (金)	第4回総合教職開発本部会 (インクルーシブ教育部門)	附属義務教育学校園における「特別入試 枠」「親子支援枠」取組の経過報告
3/ 予定	「親子支援枠」対象児入園前の 支援会議	「親子支援枠」対象児の入園後の支援に ついて検討・共通理解

(2) 遊びと学級づくりを通じたインクルーシブ教育システムを踏まえた開発研究

〔目的〕

インクルーシブ教育システムを踏まえた開発研究に関しては、「遊び」と学級づくりに焦点を絞り、下記の「4つの保障」を取組の観点として研究を進めた。

ア 「好きになる」プロセスの保障の観点：本園の対象児は自ら常に多様な「知的刺激」を望み、自分の好みの方法で、自分の興味のある分野を深く掘り下げて探求しようとする人が多い。自らの力を出す喜びを膨らませ、「好きになる」経験を存分にでき、力を発揮できるためのプロセスを探る。

イ 自由な学びの環境の保障の観点：語彙に対する鋭敏さを生かした絵本や、図鑑との出会いにつなぐなど、自由な学びの環境の中で、対象児の求めに応じてやりたいことを十分にできる環境を整えることで、より特性を生かし自己発揮できるための方法を探る。

ウ 外からの刺激と内面成長サイクルの保障の観点：対象児に対し、遊びの振り返りにより、個と集団の育ちを関連させ、外からの刺激により、内面の成長を促すことができると考える。また、対象児を深く理解し、内省を繰り返すサイクルを生む個別の指導計画を作成し、そうした個別の指導計画を踏まえつつ、対象児も他児も育ち合える学年全体の教育課程について検討する。

エ 一人一人の個性・才能を伸ばす学級経営の保障の観点：個の育ちと集団の育ちを関連付け

ながら学級経営を行い、いざこざを未然に防ぎ、自己調整能力を育成するために、教師はどのように環境を構成したり、援助したりしていくべきかを探る。

〔内容・分析方法〕 事例研究とする。

3、4、5歳児各学年で1名、対象児を抽出。

「保育チェックシート」作成

担任は日々の記録を元に、1ヶ月毎に「4つの保障」の観点に基づいて「保育チェックシート」（例参照）を作成する。このシートは、「4つの保障」の視点から、子供の遊びの様子を丁寧に記録するものであり、発達に関しての到達度チェックではなく、子供の実態を把握して支援を整えるための基礎資料とする。協働研究者と共に対象児の変容を捉え、考察する。

（例）

保育チェックシート（ 4月 ） 記録者 （ U.H ）

対象児（ 5歳児 女児 A児 ）

具体的な本日の姿から
<p>遊びの中で、自分の個性、特性を生かしながら力を出している場面、エピソード</p> <p>キーワード：自分の好みの方法、得意分野、深く探究、こだわり、自己有用感、ものと自分との関係など</p> <p>好きな遊びの時にビー玉と牛乳パックで転がしゲームを作り始める。玉の動き、転がる仕組みに興味をもつA児。牛乳パックを切り、コースをつなげ、途中牛乳パックで水車のように回る部分（以下、水車と記す）を作り上げる。年中組の時に作った経験があるようだ。水車を固定する場所はよく分からなかったようで、「どうやってあける？」と教師に聞きながらも、目打ちを自分で持ってきて、斜めにならないように穴をあけ、水車をセットする。そして、ビー玉を何度も転がしながら、水車の回り具合を確認し、作り直す姿も見られた。そこには、周りの意見を聞くというよりは、一人集中して、黙々と作業を進める。</p> <p>コースのできばえをみて、周囲の子供が「それやりたい！」と寄ってきた。A児は最初は戸惑いつつも、一緒にすることにした。そしてコースの作り方を他児に教えながら、一緒に作る姿も見られた。</p>
<p>（1）子供の個性・特性を生かした環境構成について</p> <p>キーワード：興味・関心を高める絵本、遊具、保育素材。 特性の表出に合わせた環境の再構成など</p> <p>コース内に「水車を作りたい」など、何か作りたと思った時に、すぐ作ることができるように日頃から牛乳パックや竹串などの素材を多様に用意しておく。また、目打ちや段ボールカッターなど少し危険な道具も使用可能にし、自分なりの探究につながるように環境を構成した。</p>
<p>（2）外からの刺激と内面成長のサイクルの保障について</p>

キーワード：みんなの時間での取り上げ方。次の日の保育につながる教師の援助（写真、動画、絵本など）。自己達成感。

自分でビー玉を転がし、水車が回る様子を見ていく中で、自分で作ることができたという自己達成感を感じ、また、周囲の子供から「すごい！」と言われ、さらに友達に作ってあげたり、教えてあげたりと自信を感じていた。周囲から認められていくことに喜びを感じていた。

（3）子供の個性・特性を集団の中に生かす手立てについて

キーワード：みんなの時間を使った個の育ちと集団の育ち。 特性による問題の発生を未然に防ぐ。自己調整力を育成する教師の援助

A児に「それやりたい！」と近寄ってくる他児に対して、戸惑っている様子だったので、教師は「その水車すごいから、作り方を教えてあげたら？」と促すと、A児はもう一つ同じものを作り、他児に渡していた。好きな遊びの後、みんなの時間でA児の水車について取り上げた。

【省察】

A児は進級当初より、一人遊びを好んでいた。それは、人との関わりに苦手意識がある部分や、または遊びが知的に高かったり、興味・関心を持つ部分が周囲の子供と少し違ったりしている部分も要因にあった。しかし、今回の水車作りでは、自分の意志で作った水車の面白さに周囲の子供が集まり、褒めたり認めたりしてもらえる経験をA児が味わったことで、自ら周囲の子供と一緒に水車を作ったり、水車の回し方を教えたりと集団の輪の中心で遊ぶことができた。今回そのような経験をA児が味わえたことは、自己肯定感をもつ上でも効果的だった。人と関わる上でのA児なりの術を身につけていく芽生えになったのではないだろうか。教師はその時に、A児の遊びを十分に認めながら、その良さを周囲の子供とつなぐような声掛けをしていくことが大切であると改めて考えた。

【助言者より】

4月は進級、クラス替えがあり、子供たちと保育者は、新しい関係構築、新しい集団作りを始める。担任は好きな遊びを通して、A児の得意（理数的な認知の高さと手指の操作性）と不得手（自ら他児とかかわろうとする）を見取り、得意を生かして、不得手をさりげなく支えようとしている。おそらく本児には不得手あるいは苦手という意識もあまりなく、自分の遊びが大人との関係性の中に完結しても満足はしているのかも知れない。保育者は本人の製作の支え手、他児との「さりげない」つなぎ手、全体での共有による集団中の位置付けが年度の初期にすでになされている。

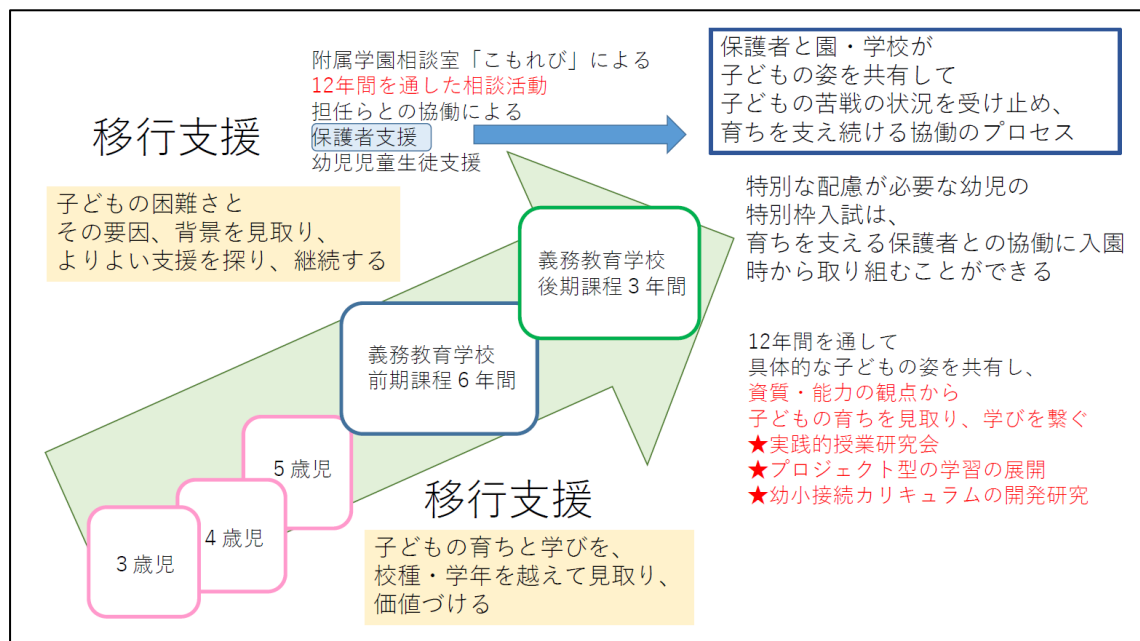
協働研究者による観察と振り返り

協働研究者（表1⑤⑥⑩）が担当学年を固定し、継続的な保育観察（参与観察、週1回半日）を実施する。映像や筆記記録を元に担任と協働研究者による定期的な保育実践の振り返りを行う（月2回）。担任らの見取りを意味付け、関わり方、保育実践やクラス作りについて検討を行う。協働研究者は不定期に担当学年を入れ替えて他学年の観察を行い、また、全学年による保育検討会（年2回）を実施する。

(3) 保護者支援を含む移行支援の在り方についての実践研究

〔目的〕

移行支援は、子供の育ちと学びを校種・学年を越えて見取り、価値づけるプロセスと、子供の困難さとその要因・背景を見取り、よりよい支援を継続することである。本研究では、特に保護者支援の在り方について検討した。保護者支援を、保護者と園が子供の姿を共有して子供の特性による状況（困難さ）を受け止め、育ちを支え続ける協働プロセスと定義し、特別入試枠は入園時から保護者との協働関係構築の実際的取組の在り方を明らかにし、保護者と園・学校が子供の姿を共有して、「子供の発達・成長を見守る」12年間のスタートとなることを示す。



〔内容〕

幼稚園を含む福井大学教育学部附属学園の学園相談室と連携した保護者相談を実施する。

12年間を通した支援

学園相談室「こもれび」では、特別支援教育コーディネーターが、幼稚園・義務教育学校12年間を通した相談業務を担っている。

保育・授業研究と連動した支援

特別支援教育コーディネーターは、協働研究者として保育参観および担任らとの実践の検証者でもあり、保育場面の実際的な子供の姿や保育の在り方を保護者と共に共有して、子供の特性理解と支援についての相談等を行う。

通常の相談体制に組み込む

保育上、何らかの戸惑いを示す子供や、育てにくさ・育ちにくさが感じられる子供を特別

視し、取り上げての保護者相談を実施するのではなく、自身の子育てや子供の育ちについて、相談できる仕組みのあることが、保護者が相談する機会を保障できると考え、以下のような内容で実施した。

ア 入園前の希望相談

入園選考以降、入園に向けての相談。日常的な事も含めて気兼ねなく相談できる環境にあることを保護者に伝えていくことをねらいとする。

イ 定期相談会（6月、12月）

保護者からの希望による。希望がない場合であっても、入園選考概要には、保護者相談会への参加を促すことも明記しており、子供の特性が推察された場合には、担任から保護者への呼びかけを行って相談会への参加を促すようにする。保護者が、子供の特性・成長を確認し、自身の子育てを捉え直すことができるようにする。

ウ 就学相談（6月、2月）

就学先の検討が必要な場合、および個別の移行支援が必要な5歳児については、担任、学園相談室相談担当者との面談を実施し、就学先の選択や移行支援シートの作成などを行う。保護者・幼稚園が子供の特性・成長を確認し、成長の願いを言語化し、次へとつなぐためである。

エ 上記を含む個別相談（随時）

子供が家庭や幼稚園での生活に一定の困難さを示したり、そのために育てにくさを保護者が感じたりしている場合には、定期的な面談の機会を設定する。保護者から家庭での状況を聴取し、園での様子と併せて、子供の特性を子供の行動の文脈で理解すること、自身の子育てを捉え直すことをねらいとする。

特別枠対象児は、上記の相談体制の中に組み込んで、選考前、入園前、入園後の相談や支援会議を行う。

4 成果と課題

(1) 特別入試枠に関する調査研究

〔成果〕

「親子支援枠」について事前に説明会を開催し、「一人一人の成長・発達に応じた適切な支援と配慮、集団の育ち合いによって子の可能性を拓き、成長を支えていく」という園側の趣旨が保護者に伝わったことで保護者不安が解消され、安心して入園できるようであった。

「親子支援枠」希望者への面談では、保護者の子に対する気がかりさや困難さを丁寧に聴取したことが安心感につながり、入園選考前からの関係作りのスタートとなった。3回参加の子育て広場では、対象児の実態を把握する手がかりとなった。子の遊び、他児との関わり、

親子関係などを細かく観察し、その後のカンファレンスを重ねる中で、対象児や保護者を幅広く見取ることができた。入園選考では、「親子支援枠」と通常入試枠を区別せず同じ内容で行ったことで、集団の中での子の様子を見ることができた。また、子が受けている保育を実行委員や本園教職員が観察し、様々な専門性から意見交換ができたことで互いの学びにつながった。「親子支援枠」入園対象児においては1月に面談を行い、子の現状を聞いたり入園後の園生活について説明したりした。保護者は具体的な園生活について知ること、入園に対する安心感や希望を持つことができた。3月の支援会議では、管理職と実行委員で具体的な支援を検討したことで、園ができることや大学教員が協力できることが明確になり、シームレスな支援のスタートとなった。また、支援会議に保護者が参加することで、園の支援体制について保護者の理解が深まった。

このように入園前から、子を深く知ること、保護者の思いに寄り添って意向をくみ取っていくことは、入園後の支援体制を考える上でとても重要であった。子や保護者の入園後の環境が整うことで、子も保護者も安心して入園できる「親子支援枠」は、子育てに不安や困難さを抱える保護者にとって大切であると考えられる。

個別の教育支援計画・個別の指導計画については、様式を12年間統一することで、記録から子の様子を理解することができ、切れ目なくつないでいく支援となる。

〔課題〕

子育て広場は通年4月から11月までであるため、「親子支援枠」の希望者が12月以降に継続して参加することができなかつた。入園前から園の雰囲気に関心し、入園後の安心感につながるよう年間を通じた子育て広場を開催する必要がある。入園選考では、観察内容の捉え方に違いが生じ、観察者の解釈が多様化した。観察者の様々な見解から学ぶことが多くあったが、何を見取るかを明確にして内容を考える必要がある。対象児への支援にあたり、面談や観察、カンファレンスや支援会議などの方向性を管理職や実行委員で検討し、実施してきた。一方で本園教職員に対する「親子支援枠」の周知、特に基本的な考え方の共有が不十分であった。今後、具体的な取組の振り返りと意味付けを全体で共有し「親子支援枠」が本園の保育をより高次化するものであることを共通理解し、園の取組として体制化していきたい。

(2) 遊びと学級づくりを通じたインクルーシブ教育システムを踏まえた開発研究

〔成果〕

ア 「好きになる」プロセスの保障

- ・力が継続的に発揮できる遊びと素材を用意する

本園の対象児は自分が興味・関心のあるもの、ことに没頭する傾向があった。まずは、没頭するための、素材、場所、時間が大切である。一人で集中して黙々と遊ぶことができる環境を用意し、操作に安全性の注意が必要な道具（目打ち、電池や豆電球、釘やト

ンカチ、木片など)も、自由に継続的に使って遊ぶことができる環境(道具、場所、見守り)が大切である。

- ・価値ある出会いを見逃さない

本園の対象児の身の回りには、様々な価値ある出会いがある。それを教師は見逃していることも多い。どのような出会いであっても、対象児にとって価値ある出会いを生かし、次へつなげることが必要である。

イ 自由な学びの環境の保障

- ・教師自身の発想の枠を超えた環境を構成する

本園の対象児はその興味・関心に偏りがあった。それゆえに興味・関心のあることへの知識や情熱は他児に比べても相当多い。対象児が遊びを進めていくと、教師の準備した環境をも超える発想や知的好奇心の高まりが見られる。例えば、電球に興味を持ったところから、電気カーへの興味が膨らみ、ソーラーパネル、発電機と持っている知識を基に思いは膨らんでいく。幼稚園で用意できる環境は限られているが、可能な範囲で対象児の興味・関心に寄り添い、日常使わない素材、環境についても対象児に聞きながら、一緒に準備していく姿勢が大切だと考える。

- ・知的好奇心を満足させる教材の提供

本園の対象児の知的好奇心は偏りがあるものの、多様であったため、対象児の知的好奇心に寄り添い、学びの環境を保障していくためには、多様な分野の絵本、図鑑等を用意しておくことが重要である。

- ・自己選択を保障する

本園の対象児は特定の対象に対する興味・関心、知的好奇心が強く、自らの選択にこだわることも多くあった。教師の思いや意図、集団の活動との兼ね合いを見ながら、自由に選択することを保障していくことは特性を發揮していくために大切である。

ウ 外からの刺激と内面の成長のサイクルの保障

- ・みんなの時間で知的好奇心を揺さぶり、また自己省察につなげる

本園の対象児は、遊びに没頭している時や探究している時は一人の時間を好むが、ある程度、形になったり満足したりするとそれを誰かに伝えたいことが研究の中で見えてきた。本園では、好きな遊びの後に、遊びを振り返ったり、次へつなげたりするための「みんなの時間」を設けている。対象児はそこで自分のしたことを毎回発表したいと要求する。他児の前で発表することで、自分の研究したことを省察し、また次への目標をも考える。また、他児の発表から刺激を受けることもある。教師は、対象児と他児とのつなぎ役をしながら、お互いが刺激し合い、高め合えるような声かけをしたり、共有したりしていくことが大切である。

- ・その子自身を肯定的に発信する

本園の対象児は集団活動への参加に困難さを示したり、時には周囲を戸惑わせたりすることがある。教師はその行動や表現を肯定的に捉えて、クラスの周囲の子供たちに発信していくことが大切である。そして、周囲からも肯定的に受け入れられる雰囲気づくりと、遊びや生活の中でみんなで過ごす時間を作ることなどが求められる。

エ 一人一人の個性・才能を伸ばす学級経営の保障

- ・他者からの理解を得ることを支える

本園の対象児は、一人の世界の中で遊びに没頭することが多く、その中で自分のイメージ通りにできると充実感を味わっていた。教師はその状況を共有して見取り、共感的に声をかけ、対象児は自分の充実感を他者と共有することによって達成感へとより高めていく。教師は、対象児との共感を周囲の子供たちと共有することで、子供たちの対象児への理解が増し、対象児の個性を生かしながら集団としての力につなげていく。

- ・対象児の世界観を保障し、生かす

本園の対象児の遊びは、他者から理解されることで、集団としての高まりへとつながっていった。しかし、何もかも他者理解を図ると、他者からの関わりが増え、対象児が困惑することも考えられた。対象児は基本的に一人でじっくりと遊び、探究したい。その途中に他者が入ってくることで、自分の居場所が侵害されたと感じ、不快に感じるようだった。教師は他者理解を図るタイミングと方法をよく吟味し、つなげていく必要がある。

[課題]

教師は個の発達段階を見極めながら社会性や協働性を大切にして保育を行う。一方で、集団活動になかなか参加できない子供もおり、対象児には一定の配慮も必要である。幼児自身ができるようにしたり、一人一人に応じた保育を保障したりしていく柔軟な体制が必要であることは分かった。しかし、子供は個々に違い、集団性と一人一人に寄り添うことが成り立つ柔軟な保育体制の形成は常に課題であり続ける。子供一人一人が生き生きと生活できるように課題をもって取り組むことが必要である。

(3) 保護者支援を含む移行支援の在り方についての実践研究

[成果]

担任との信頼関係を基盤とした相談活動をしたことで、保護者支援としても以下のような成果が得られた。

- ・子供理解と子育ての捉え返し

担任など直接の幼稚園関係者ではない相談担当者による相談の実施は、保護者としては客観的な目を通して子供の様子を知ることができる。家庭と幼稚園での子供の行動を重ねて捉えることができ、行動を意味付け直す作業を相談者と共に行うことになった。この作

業は子供の特性を理解するとともに、保護者自身が自分の子育てを捉え返すことにもなり、保護者の変容を促すことができた。

・子供への理解を整理する手立てへの理解

子供理解と子育ての捉え返しは、子供の行動が何らかの要因によること、要因を整理して理解を深めることで、よりよい関わり（子育て・保育）を探り、成長を促すことの必要性を保護者が肯定的に理解することができた。その結果、学園相談室「こもれび」による発達検査や医療機関受診につながり、子供への理解を整理し、子育てや保育に生かすことができた。

・実効性のある移行支援の取組

保護者が、相談を通して他者（相談者）と共に子供の行動や自身の養育を捉え返す作業は、子供の成長にとって意義があることを実感し、子供の特性を開示することで、学校と協働的な関係の下、有効な支援を積極的に受けることを期待するようになった。こうした保護者の理解は、幼稚園と小学校が子供の成長の姿を共有して支援が継続できるように、実効性のある移行支援を可能にした。

〔課題〕

インクルーシブな保育が展開されている場合に、子供の不得意な分野に考慮し配慮することが組み込まれた活動は、ともするとそういった配慮に対して、教師・保護者とも暗黙的になりがちである。この場合、教師・保護者ともに子供の不得意分野への理解や関心が低くなり、移行支援として取り組まれないことも多くなる。子供の不得意な分野に関する部分は発達段階に応じた成長課題となって表れ、子供の苦戦状況を引き起こすことになる。子供の特性を見取り、「よくなった」「うまくいっている」ことの要因を検討して、子供の成長を支え続けるプロセスとしての移行支援の視点が弱く、十分には取り組まれていない。

5 最後に

本研究は本園のインクルーシブ教育システムの実践を基盤に取り組み、個の成長と保育集団の成長の有機的な往還が、年齢を重ねて繰り上がっていく中に、多様な子供の成長があるとする本園の実践を改めて意義付け、今後を方向付けるものであると考えている。本調査研究の意義を、園の保育実践に重ねて改めて捉え直したい。

ア 協働研究者と共に保育を捉え直したことから

本調査研究では、協働研究者と共に保育を見取る視点を定め、本研究の対象児を選び、その観察方法、見取り方などを検討してきた。協働研究者は本研究の実行委員や幼児教育専門の大学教員らである。週1回保育を開放し、協働研究者による半日の参与観察を実施し保育後に振り返りの時間を持った。これまでにこれほど頻回に自身の保育について他者と振り返る、語り合う機会を持つことはなく、自分の取組を客観的に捉え直すことができた。「個の特性に寄り添い、生かし、集団へつなげる／集団の中に位置付けられることが個の成長を支える／個の特性と成長は集団の成長の力となる」という個

と集団の成長の両方向性の視点で、語り合ったことは教師としての学びにつながった。
また園のインクルーシブ教育システムを、構造化して、捉え直すことにもつながった。

イ 園の研究との兼ね合いから

本園での独自で行っている研究テーマは、「つながりが育む学びの深まり～出会い、気付き、好きになる～」である。一人一人が豊かな環境の中で多様に出会い、遊び、気付いたり、試行錯誤したりする中で、もの、こと、人、自分を好きになっていくプロセスを読み解いていったが、本調査研究でも、個の特性の中で多様に出会い、その子なりの感性で向き合い、力を発揮しながら好きになっていくことを大切にし、その好きになった熱意が周囲に広がり、集団としての高まりへとつながっていくことを目指してきた。つまり、本調査研究を通して、どの子供も大なり小なり特性を持っており、それがその子の良さでもあるということ、そしてその良さを生かし、力として発揮していくことが幼児教育としても大切であることをチェックシートの記入や、協働研究者との語り合いから確信し、理解することへとつながった。

ウ 教師一人一人の保育の質の向上から

本調査研究の抽出児は、集団の中で困難さを感じている場合が多い。通常、このような困難さを感じている子供に対して、補助の教師が取り出して対応することもあるだろう。しかし、本調査研究では、個の特性に寄り添い、担任は個と全体をどのようにつなげ、広げていくかを中心に考えている。そこには、教師一人一人の個の特性の捉え方、生かし方、集団へのつなぎ方など多様な保育展開が求められる。本調査研究を通して、各教師が個の多様な特性に寄り添い、生かすために様々な保育方法を考え、取り組んできた。それが、教師一人一人の保育の質の向上へとつながっていった。

エ 幼児期から保護者自身が子供の特性に向き合うことの大切さから

本調査研究では、幼児期から保護者が子供に向き合うことで、特別な配慮が必要な子供の成長が実現することを願っての特別枠選考である。保護者が子供に不得意な分野があることを一定、認めて開示していることは、入園後の保護者との関係構築が滑らかにできることが予想される。入園選考の実施にあたっては、子供の特性にのみ着目することなく、保護者との協働関係も選考の観点となるような入園選考の在り方を、さらに検討する必要がある。

令和4年度 園児募集要項

別紙1

福井大学教育学部附属幼稚園

〒910-0015 福井県福井市二の宮 4-45-1

(電話) 0776-22-6687 (FAX) 0776-22-6718

令和4年度本園に入園する幼児を下記により募集します。本園は学校教育法に基づき幼児を保育するとともに、教育理論の実証的研究並びに福井大学教育学部学生の教育実習を行う特殊な使命と性格をもっています。また、本園では、幼児自らが遊びをつくり出すことを大切に、個と集団を絡めながら遊びを進展させ、一人一人の望ましい発達を促しています。その際、幼児の家庭環境や生活経験を踏まえ、個の特性に応じた丁寧な関わりを大切にしています。

そこで、今年度から気がかりさや育てにくさを感じておられる方を対象に「親子支援枠」を設け、集団生活の中でお子様の成長を支えるためにご家庭と園がより一層の連携を行っていくこととしました。

上述のことをご理解いただいた上で出願してください。

記

- 1 募集人数 3年保育児（3歳児）40名程度 2年保育児（4歳児）若干名
※「親子支援枠」若干名を含む。別紙参照
- 2 応募資格 <<一般枠・親子支援枠共通>>
 - (1) 3年保育児（3歳児）
平成30年4月2日から平成31年4月1日までに出生した者
2年保育児（4歳児）
平成29年4月2日から平成30年4月1日までに出生した者
 - (2) 保護者と同居し、その家庭から通園できる者
通園可能と認める範囲は、幼児にとって身体的・精神的に無理がないと認められる範囲とします。（通園時間は30分以内を目途とします）
 - (3) 通園には、責任もてる人が付き添うことができる者

※「親子支援枠」の受検を希望される場合は、併せて別紙をご確認ください。
一般枠・親子支援枠のどちらで応募されたかの守秘は厳守します。
- 3 出願期間 令和3年9月10日（金）～9月16日（木） 9月16日（木）消印有効
- 4 出願書類
 - ① 入園願書（検定料振込受付証明書貼付）・志願票
 - ② 住民票（本人分のみで、本籍記載は不要）
 - ③ 志願者票返信用封筒（角2封筒を準備し、郵送先を記入。440円切手貼付）

※募集要項（入園願書）は附属幼稚園または附属学園事務室でお受け取りください。
検定料1,600円は本園所定の振込依頼書により銀行等（郵便局を除きます）
窓口で納入してください。振込時の振込手数料は、振込人負担となります。
出願書類を受理した後は、既納の検定料は返還できません。

- 5 出願手続 (1) 上記出願書類の記入等を済ませた後、①～③の書類を市販の角2封筒(240mm×332mm)に入れ、募集要項と共に配布する所定の宛名ラベルを貼り、郵送(簡易書留)してください。
- (2) 9月21日(火)までに志願者票が届かない場合には、附属学園事務室にお問い合わせください。(0776-22-7171)

- 6 入園選考 (1) 日時 **令和3年9月25日(土)**
受付時刻は、志願者票返送時にお知らせします。
※受付終了時刻までに受付がない場合は、棄権とみなします。
- (2) 場所 福井大学教育学部附属幼稚園 福井市二の宮4丁目45-1
*注意事項
・必ず志願者票をご持参ください。
・幼児は内ズックを持参。ズボンなど動きやすい服装で受検してください。
保護者の方は上履きをご持参ください。
・受検する幼児1名につき、保護者の入場は2名までとします。
- (3) 合格発表 **令和3年9月29日(水) 16:30**
・本園正面玄関前に受付番号のみを掲示します。一般枠・親子支援枠の公表はありません。
*注意事項
・志願者の保護者が、志願者票をご持参ください。電話などによる照会には応じられません。お子様の同伴はご遠慮ください。

- 7 合格手続 (1) 日時 **令和3年9月29日(水)**
合格発表後すぐに行います。
- (2) 場所 福井大学教育学部附属幼稚園 遊戯室
- (3) 内容 イ 志願者票と引き換えに合格通知書をお渡しします。
ロ 合格手続き後に事務手続きの説明があります。

※合格手続きがない場合は、入園意志のないものとみなします。

- 8 注意事項 (1) 今年度は感染防止のため公共交通機関を利用しないことも認め、入園選考日及び合格発表日における自家用車での来園を可とします。義務教育学校中庭駐車場に駐車し、プール横を歩いてお越しください。
- (2) お子様・ご家族ともに体調を整え、検温の上、ご来園ください。なお、当日、体調等でご心配な場合は、園までご相談ください。
- (3) 園児募集に関してご不明な点がございましたら、下記にお問い合わせください。
イ 募集内容について 附属幼稚園 (0776-22-6687)
ロ 出願手続について 附属学園事務室 (0776-22-7171)
- (4) 一般枠で入園後、園生活を送る中で親子支援が必要であると考えられる場合には、ご相談の上、親子支援枠に移行することがあります。

- 9 園見学 見学を希望される方は、「子育て広場」解放の際、園庭等の見学ができます。お子様同伴でも構いません。個別の見学希望がある場合は、園までご相談ください。

10 個人情報の利用

出願書類等に記載された個人情報は、①入園選考の実施、②入園手続き、③入園者の受け入れ準備に使用する目的で福井大学が管理します。よって、この目的の範囲内で福井大学の教職員が利用する場合及び保護者の同意を得た場合の他は、原則として他の目的で利用したり、福井大学の教職員以外に提供したりすることはありません。

幼稚園案内

1 本園について

・学級数 3歳児 2学級 4歳児 2学級 5歳児 2学級

・諸経費

入園料 31,200円（予定額）

保育料 年額 73,200円（予定額）

※本園の入園料・保育料等については、無償化の対象となります。無償化の手続き等の詳細は合格手続き時にお知らせします。

2 通園の便

本園の位置は、福井市二の宮4丁目45の1で、芦原街道を福井大学前から北に約2km、史蹟「新田塚」の東側です。

通園の便としては、①京福バス新田塚停留所で下車、徒歩5分、②京福バス二の宮4丁目停留所で下車、徒歩1分、③えちぜん鉄道新田塚又は八ツ島駅で下車、徒歩12分などがあります。

【別 紙】

「親子支援枠」について

今年度より、入園選考において「親子支援枠」を設けます。キラキラと輝く目で探求的な遊びに集中し、特定の分野では能力を発揮する一方で、コミュニケーションや行動面などで個性というには気がかりな面も感じておられることはありませんか。そんなお子様の保育・養育に保護者の皆様と、入園前から協働して取り組んでいきたいと願って「親子支援枠」を設けました。個の特性に応じたより丁寧な関わりをできるだけ早くから行いたいと考えているからです。ただし、入園後に学級から取り出して保育を行うわけではありません。他児と一緒に遊ぶことを、その場その場で適切に支えていきたいのです。一人一人の成長・発達に応じた適切な支援と配慮、集団の育ち合いによってお子様の可能性を拓き、成長を支えていきたいと考えております。

「親子支援枠」

(1) 募集定員 若干名

(2) 募集要件

- ①園からの質問内容に回答する。
- ②園が指定した「子育て広場」（8月5日、26日、9月9日）に参加する。（必須）
- ③合格後、学園相談室の定期面談および園の健康相談を受ける。（同意書提出）

なお、附属学園では福井大学教育学部、福井大学連合教職大学院、福井大学子どものこころの発達研究センターと連携して相談活動を行っております。

(3) 「親子支援枠」への申込み

ご希望の方は、7月27日（火）～30日（金） 10:00～16:00の期間に園までご連絡ください。(0776-22-6687)

幼稚園・大学インクルーシブ教育部の協働実践体制 別紙2-1

取組	幼児観察・検討会		保護者支援		親子支援枠関係			地域支援
	幼児観察	検討会	教育相談	健康相談	幼児観察	検討/相談	ワーキング委員会	子育て広場
園外スタッフ	学園相談室・大学院教員		学園相談室	園医	インクルーシブ教育部			インクルーシブ教育部
4月	月2回	学年	親子支援	親子支援	月1回	カンファレンス 第1回		観察・相談
5	月2回	全体			月1回	支援会議 第2回		観察・相談
6	月2回	学年	1回目	1回目	月1回			観察・相談
7	月2回	全体			月1回	第3回		観察・相談
8								観察・相談
9	月2回	全体	親子支援	2回目 親子支援	月1回	カンファレンス 第4回		観察・相談
10	月2回	学年			月1回	支援会議 第5回		観察・相談
11	月2回	全体	2回目		月1回			観察・相談
12	月2回	学年			月1回	カンファレンス 第6回		観察・相談
1	月2回	全体	親子支援	親子支援	月1回	支援会議 第7回		観察・相談
2	月2回	学年	3回目	3回目	月1回	第8回		観察・相談
3	月1回	全体			月1回	カンファレンス 支援会議 第9回		観察・相談

幼児観察・検討会

各学年の担当スタッフが定期的に保育を観察し、担任と保育検討会を実施。特定の幼児だけではなく、保育全体を通して子の姿を追い、日常的な保育の振り返りと実践に活かす。
令和3年度…各担任と3歳児は宮本(教職大学院)、4歳児は船谷(インクルーシブ教育部、学園相談室こもれび)、5歳児は荒木(インクルーシブ教育部、学園相談室こもれび)

保護者支援

年に教育相談会(2~3回)、健康相談(3回)の定期的な相談会を実施し、早期から保護者が気軽に相談できるようにする。
担当…健康相談:竹内Dr(園医)、教育相談:荒木(学園相談室こもれび)、野阪・忠見(園の養護教諭が調整・記録等)

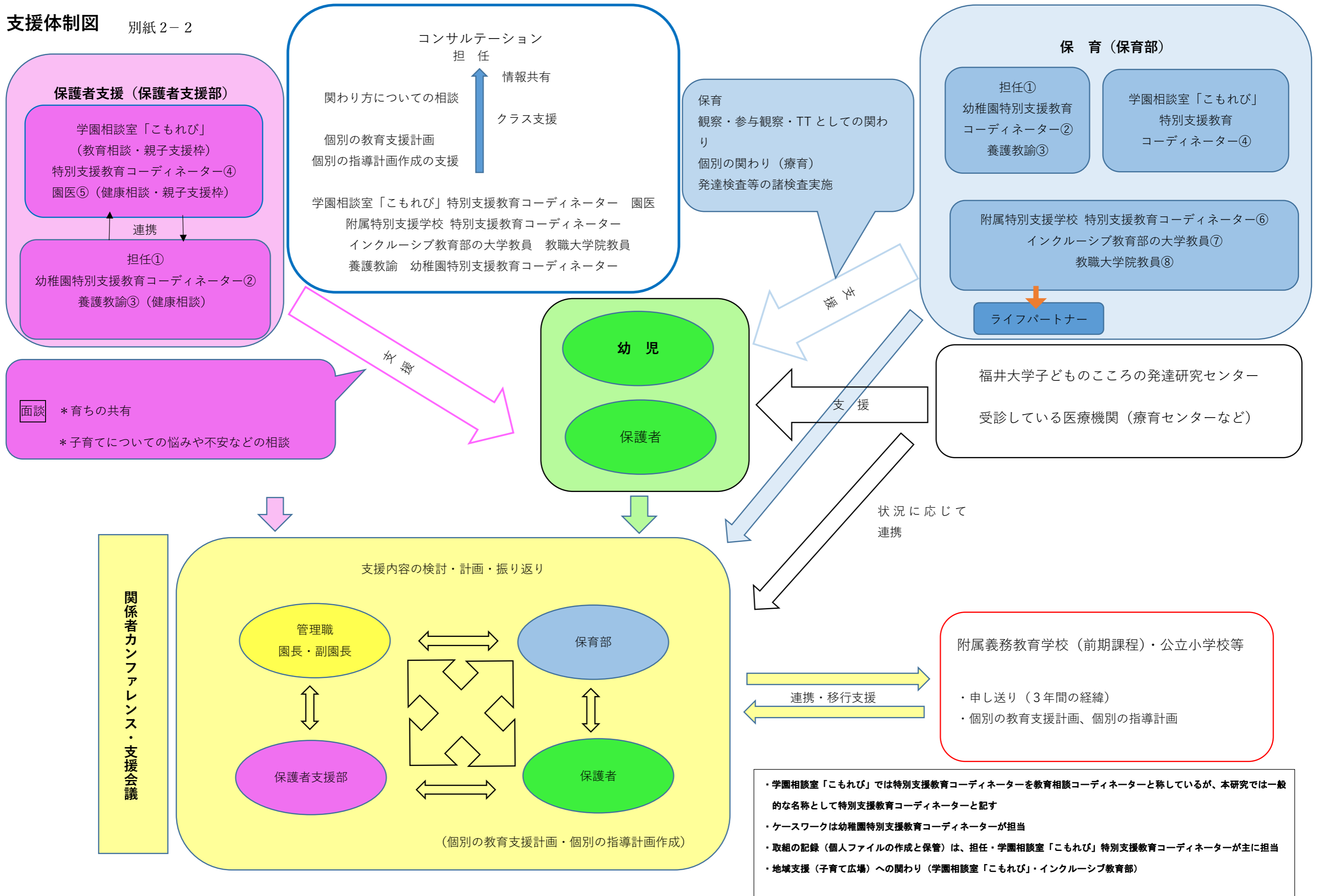
「親子支援枠」関係

入園選考および入園後の支援に取り組む。定期的な幼児観察、担任らとの検討、保護者の相談。選考の在り方の検討や保育の検証に取り組む。附属学園を通じた気付きがある子供の成長・発達にかかわるコホートの研究の一端を担う。
令和3年度ワーキングメンバー…北園長・大野副園長・上田・前田(園)、笹原(インクルーシブ教育部)、藤岡・荒木・船谷(インクルーシブ教育部、学園相談室こもれび) + 南雲(インクルーシブ教育部)

地域支援(子育て広場)

「親子支援枠」入園選考に関わって、子育て広場に定期的に参加する。
また、子育て広場を利用する(「親子支援枠」以外の)保護者への相談・支援も行う。
令和3年度…担当:松田(園の子育て広場担当) 笹原・南雲(インクルーシブ教育部)、藤岡・荒木・船谷(インクルーシブ教育部、学園相談室こもれび)

上記は厳密に担当を分けるものではない。学園相談室こもれびと大学インクルーシブ教育部が中心となり、教職大学院スタッフらとも連携し、幼稚園と協働した取組を行う。保育実践とインクルーシブ教育システム構築、保育研究が一体となった取組である。



個別の教育支援計画・指導計画シート(幼稚園用) 別紙3-1

<プロフィール・シート>

幼稚園

令和 年度入園

ふりがな 氏名		性別		生年月日 平成 年 月 日
これまでの状況 (月)	好きなこと 伸ばしたい ところ			
	苦手なこと 支援が必要な ところ	<input type="checkbox"/> 対人関係・社会性 <input type="checkbox"/> コミュニケーション能力 <input type="checkbox"/> 興味とこだわり <input type="checkbox"/> 不注意(注意欠如) <input type="checkbox"/> 多動性・衝動性 <input type="checkbox"/> 認知・推論・学習面・運動面 <input type="checkbox"/> 行動・情動		
生育歴・相談歴等	診断名 () () 病院 Dr. 年 月 検査 () 結果 () 療育手帳等:有・無 ()			
連携	家庭・地域	医療	福祉	その他
保護者・本人 願いや思い				
支援の内容				

※このシートに記載されていることについて承認します。また、支援関係者で情報共有を図るために活用することに同意します。

3歳児 令和 年 月 日 保護者 氏名 印	4歳児 令和 年 月 日 保護者 氏名 印	5歳児 令和 年 月 日 保護者 氏名 印
記入者	記入者	記入者

個別の教育支援計画・指導計画シート 幼稚園用 別紙3-2

<指導・支援シート>

幼稚園

氏名

令和

年度入園

	年(月 日 作成)	年(月 日 作成)	年(月 日 作成)
担任名			
願 い ・ 思 い	保護者		
	本人		
	担任		
幼児の実態			
目標			
合理的配慮 (個別支援)			
評価			
引継ぎ事項			

個別の教育支援計画・指導計画シート幼稚園用 別紙3-3

幼稚園

氏名

令和

年度入園

<支援会議等の記録>

支援会議等の記録	月日	参加者	話し合われた内容(記入者を明記)

※ 保護者からの電話や連絡帳等での相談についても記載する

令和 3 年度 保育観察 実施報告 福井大学教育学部附属幼稚園

月	日	曜日	対象学年	参観者	保育検討会
4	14	水	年長、年中、年少	荒木、船谷、宮本	○
	21	水	年長、年中、年少	荒木、船谷、宮本	○
	28	水	年長、年中、年少	荒木、船谷、宮本	○
5	12	水	年長、年中、年少	荒木、船谷、宮本	○
	19	水	年長、年中、年少	荒木、船谷、宮本	
	20	木	全体検討会議	荒木、船谷、宮本	
			【検討内容】 ・対象児の抽出について ・保育観察日は毎週予定とするが、都合のよい時に観察していただくこと ・月一回、学年を交替して参観してもらい、全体としての育ちや様子をみていただくこと ・保育検討会は月1、2回行うこと。(する日は担任とその都度相談)		
6	2	水	年長、年中、年少	荒木、船谷、宮本	
	9	水	年長、年少	荒木、宮本	○
	16	水	学年交替	荒木、船谷	
	23	水	年長、年中、年少	荒木、船谷、宮本	
	30	水	年中	船谷	○
7	7	水	学年交替	荒木、船谷、宮本	
	14	水	年長、年中、年少	荒木、船谷、宮本	○
9	8	水	年長、年中	荒木、船谷	
	22	水	年長、年少	荒木、伊藤、宮本	○
10	6	水	年少	宮本	○
	27	水	年中	船谷	
11	10	水	年長、年中、年少	荒木、船谷、宮本	○
12	1	水	年長、年中、年少	荒木、船谷、宮本	○
	15	水	年長、年中	荒木、船谷	
	22	水	年中	船谷	
1	19	水	全体検討会議	荒木、船谷、宮本	
			・各学年記録、考察の共有、今年度のまとめ ・来年度の見通し		
2	9	水	年長、年中、年少	荒木、船谷、宮本	○
3	16	水	年長、年中	荒木、船谷	

